

重点取組分野	令和 7 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく力	①未来に向かって自己実現していく子どもを目指し、子どもが主体的に課題解決できる単元づくりに取り組む。 ②基礎基本を基に、自ら問題を見つけて解決する力(知耕)をはぐくむため、学習や生活の中で探求心を育て解決力を身につける指導を工夫する。 ③個別最適な学びの可能性や課題について研修を通して共有し、授業改善につなげる。	①重点研究会でめざす子どもの姿を明確にしなが、子どもが主体的に課題解決できる単元づくりに取り組んだ。 ②③引き続き、子ども一人ひとりをみとり、基礎基本を大切にしながら個に応じた指導や学習方法を工夫していくことで、自ら問題を見つけて解決する力を育んでいく。	B
	①道徳年間指導計画をもとに、ふれあいや体験を重視し、実感を伴う道徳の授業を充実させ、道徳的価値を十分に味わえるようにする。 ②人やものにふれる本物の体験を重点的に取り入れ人との関わり合いを大切に授業づくりに取り組む。 ③地域とのつながりを校内で共有する。	①ふれあいや体験を通して実感を伴う道徳を行っていくように計画的に進めることができた。また、他教科とのつながりを確認しながら行うことができた。 ②③地域の方とのかわりきかけに、興味関心が増え、自分の町を大切にするきっかけに繋がった。地域の方と教師側の思いの差が出ないように、都度話し合いの場や、学年間の繋がり意識を醸成して共有していく場を設けていく。米作りについては、新5年生が見学をもつて引き継げるように、5年生が経験や伝統を発信して田植えのことを教えることができた。	A
豊かな心	①一校一実践(長なわ・短なわ)の年間計画を立て、体力の向上を図る。 ②養護教諭による保健指導や学校保健委員会の取り組みを通して、児童の健康に対する意識を高める。 ③浅間台小マルシェの取組目標を共有して計画的に栽培活動に取り組む。児童が自然の恵みや自分を取り巻く人々へ感謝する気持ちを保護者や地域に主体的に発信できるようにする。 ④地耕の栽培活動と食育を関連付けて、食育のカリキュラムマネジメントおよびSDGsを推進する。	①委員会の児童が発信して、全校で一校一実践の長縄に取り組み、体力の向上を図ることができた。 ②養護教諭による定期的な保健指導や学校保健委員会の取り組みを通して、児童が自分の健康を振り返ることができた。 ③④浅間台小マルシェは年度初めに食育と関連させた計画を立て、バランスよく実施できるように見直しをしている。	B
	①地域の材を活用し、児童が地域とのつながりを実感できるような教育活動に取り組む。 ②路耕の時間を通して児童が活動の意味を十分理解できるように、教師と講師が連携を取りながら計画・運営をする。 ③姉妹校等との国際交流を相手校とよく話し合い、計画的にカリキュラムを作成し推進する。	①社会や総合的な学習の時間、マルシェ、路耕などで地域の方々と関わる事ができた。 ②講師と内容を確認する時間を設け、児童の活動を充実できるようにしていく。 ③姉妹校や中国交流では全学年が交流できた。姉妹校との交流は、回数や実施の仕方を相手校と相談していく。	B
社会とつながる力			
児童指導	①年度初めに児童指導の方向性を全教職員で共有し一貫した指導を実施する。学年を中心としたブロックでの対応を主とし、経験によらず一貫した指導を迅速に行う。 ②支援が必要な児童についてアセスメントを十分に行いどの子ども安心して生活できる学校づくりを目指して個に応じた指導・支援をしていく。 ③たて割り活動では、児童が付けた「あすみち活動」という名前を使いながら、自分の役割を自覚して、自分も他の人も大切な存在として行動できるようにする。70周年のマスコットもたて割り活動に生かす。	①学校のきまりを随時見直し、今の児童の実態に合ったルールへの変更や追加等を検討し、決まったことを職員間で共有して実践できた。 ②児童理解委員会の時間を使って、課題のある児童や、支援が必要な児童について十分に職員間で共有をした。また、個に応じた支援を管理職、専任、学年、必要に応じてSSW入り、アセスメントを行い支援することができた。 ③70周年記念運動会や音楽会等を通してマスコットを活用するとともに、たて割りの取り組みを取り入れたり、集会や全校通足を通して仲を深めることができた。	A
	①特別支援教育校内委員会を中心に組織的な支援と関係機関との連携を図る。 ②支援が必要な児童の情報共有を図るとともに、年度当初にアセスメントの機会を設け、特別支援教室など個に応じた指導・支援を充実する。また、地域療育センター等の関係機関と連携し、相談や研修を計画する。 ③教科分担制や休み時間の見守りなど、全職員で児童の健全育成に取り組んでいく。	①必要に応じて柔軟に特別支援教育校内委員会を開き、組織的に支援につなげた。児童支援専任、個別級担任など様々な視点から検討し、学びの場をつなぐステップアップ教室の運営ができた。 ②中部地域療育センターによるコンサルテーションを5月に全学年実施した。必要に応じて2回目も実施し、指導・支援を充実することができた。 ③教科分担制や見守りを通して、様々な職員で児童の育成を行うことができた。	A
特別支援教育			
	①浅間台小学校いじめ防止基本方針に基づき、「いじめ防止対策委員会」を月1回以上定期的に開催し、情報を共有する。また、年度初めにいじめへの対応についての研修を行う。 ②外部機関との積極的な連携を推進する。 ③低・高別にチームマネージャーを配置し、いじめの未然防止、早期発見に努める。 ④年2回の教育相談を行い、子どもの困り感に寄り添った指導・支援を進める。	①いじめなどの児童間のトラブルにおいて、対策委員会を開き、対応について話し合い、すぐに対応することができた。定例会議についても担任がシステムへ詳細を入力し、皆で対応の共通理解を図った。 ②SSWや西区役所、児童相談所、警察と事案によって連携して対応することができた。 ③チームマネージャーの運用についてはより十分なかかりについて考えていきたい。 ④教育相談を通して、児童の困り感や気持ちに寄り添い、支援を行うことができた。	B
いじめへの対応			
人材育成・組織運営(働き方)	①教科担任制やチームマネージャーを活用したチーム学年経営を行い、それぞれの立場で学校教育目標に基づいた教育を行えるような人材を確実に育てる。 ②校務分掌を改善し、問題解決に向け自ら学び、学校経営の改善に向け主体的に発信できる人材の育成を推進する。 ③働き方改革:全体を見通した計画的な校務の執行を推進するとともに個々に指導をしていく。	①教科担任制を取り入れ、学年経営に活かしたことで、教員の学級経営力・授業向上力につながっている。 ②校務分掌組織の改革に向け、個々の教職員が主体的に問題解決について考えることができた。 ③会議を効率的に実施できるように、会議の終了時刻を意識し実施できた。	B
	①地域の見守り隊による登校時の見守り活動とスクールゾーン対策協議会の通学路点検等を通し安全対策の充実を図る。 ②地域コーディネーターが運営する地域学校協働活動本部(つながりの坂道の会)を中心に、地域企業との連携を進め、児童と教職員が積極的に参加できるようにする。 ③避難訓練や引き取り訓練を見守りや保護者の実態を考慮して意図的・計画的に行い、児童・保護者の防災への意識を高める。	①地域の見守り隊の見守り活動やスクールゾーン対策協議会の通学路点検等を通し、安全対策の充実を図った。 ②地域懇親会では地域学校協働推進員とつながり、まちや企業等と連携した教育活動を行うことができた。次年度に向けて下級生に伝えていく活動も行う。 ③引き取り訓練を土曜日に実施することで、保護者の参加が増え、防災意識を高めることができた。	B
地域学校協働活動			
ブロック内評価後の気づき	今年度は全校で創立70周年を祝い、地域の方々との関わりを通して、自分の学校や町を大切にすることを更に高めることができた。 プロジェクトや部会で随時、学校のきまり等を検討し、児童が安心して学校生活を送ることができるように学校全体で見直しを図った。児童間のトラブルや特別な支援を要する児童等について、全教職員で共有し、即座に対応し、いじめの未然防止や早期解決に努めることができた。		
	運動会や授業参観、創立70周年記念式典等で、児童が意欲的・主体的に学習したり、学校行事に参加したりする姿を参観することができた。特に、70周年記念式典では、児童が主役となり、記念式典を運営し、全校を上げて祝う姿に感動した。 登下校の見守りから、正しい生活習慣を身に付けている児童が多い中、挨拶や登校時刻が守られていない児童が少数いる。大きな声で挨拶ができる学校を目指して取り組んでほしい。		
学校関係者評価			
中期取組目標振り返り	創立70周年記念式典に向けて、浅間台小学校の明日をつくる「あすみち」のテーマに向かって、全校で取り組むことで、児童の主体的な姿が様々な場面で見ることができた。また、高学年を中心に、地域との関わりを通して、学校の歴史等を学ぶことができ、地域との深い繋がりに気付くことができたことは成果である。 特別支援教育や児童指導については、日頃から教職員間で共有を行い、いじめ未然防止や解決に向けて、全教職員で取り組むことができた。児童や保護者の学校評価アンケートでは、安心して学校生活を送ることができているとの回答結果が8割を超えていた。		

重点取組分野	令和 8 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく力	①未来に向かって自己実現していく子どもを目指し、子どもが主体的に課題解決できる単元づくりに取り組む。 ②基礎基本を基に、自ら問題を見つけ解決する力(知耕)をはぐくむため、学習や生活の中で探求心を育て解決力を身につける指導を工夫する。 ③個別最適な学びの可能性や課題について研修を通して共有し、授業改善につなげる。		
豊かな心	①道徳年間指導計画をもとに、ふれあいや体験を重視し、実感を伴う道徳の授業を充実させ、道徳的価値を十分に味わえるようにする。 ②人やものにふれる本物の体験を重点的に取り入れ人との関わり合いを大切に授業づくりに取り組む。 ③地域とのつながりを校内で共有する。		
健やかな体	①一校一実践(長なわ・短なわ)の年間計画を立て、体力の向上を図る。 ②養護教諭による保健指導や学校保健委員会の取り組みを通して、児童の健康に対する意識を高める。 ③浅間台小マルシェの取組目標を共有して計画的に栽培活動に取り組み、児童が自然の恵みや自分をとり巻く人々へ感謝する気持ちを保護者や地域に主体的に発信できるようにする。 ④地耕の栽培活動と食育を関連付けて、食育のカリキュラムマネジメントおよびSDGsを推進する。		
社会とつながる力	①地域の材を活用し、児童が地域とのつながりを実感できるような教育活動に取り組む。 ②路耕の時間を通して児童が活動の意味を十分理解できるように、教師と講師が連携を取りながら計画・運営をする。 ③姉妹校等との国際交流を相手校とよく話し合い、計画的にカリキュラムを作成し推進する。		
児童指導	①年度初めに学校のきまりを全教職員で確認し、年間を通して順に方針で指導することや子どもにとって安心安全な学校生活になるようにする。また、変更や追加した方がよいことについてはブロック単位にあげ、きまりをアップデートしていく。 ②子ども会委員のテーマと連携を図り、環境委員会を中心とした豊かな人間感覚を養うための活動を年間を通して行う。 ③転居を受ける児童について、月1回の情報交換会を共有し、アセスメントを十分に持って全体で手立てを共有し、実施していく。 ④「あすみち活動」(たてわり活動)の中で集会や通足、遊びを行い、学年に応じた役割を意識し、自他を大切にしながら行動することができるようにする。		
特別支援教育	①特別支援教育校内委員会を中心に組織的な支援と関係機関との連携を図る。 ②支援が必要な児童の情報共有を図るとともに、年度当初にアセスメントの機会を設け、特別支援教室など個に応じた指導・支援を充実する。また、地域療育センター等の関係機関と連携し、相談や研修を計画する。 ③教科分担制や休み時間の見守りなど、全職員で児童の健全育成に取り組んでいく。		
いじめへの対応	①浅間台小学校いじめ防止基本方針に基づき、「いじめ防止対策委員会」を月1回以上定期的に開催し、情報を共有する。また、年度初めにいじめへの対応についての研修を行う。 ②外部機関との積極的な連携を推進する。 ③低・高別にチームマネージャーを配置し、いじめの未然防止、早期発見に努める。 ④アンケート実施と合わせて教育相談を行い、子どもの困り感に寄り添った指導・支援を進める。		
人材育成・組織運営(働き方)	①教科担任制やチームマネージャーを活用したチーム学年経営を行い、それぞれの立場で学校教育目標に基づいた教育を行えるような人材を確実に育てる。 ②校務分掌を改善し、問題解決に向け自ら学び、学校経営の改善に向け主体的に発信できる人材の育成を推進する。 ③働き方改革:全体を見通した計画的な校務の執行を推進するとともに個々に指導をしていく。		
地域学校協働活動	①地域の見守り隊による登校時の見守り活動とスクールゾーン対策協議会の通学路点検等を通し安全対策の充実を図る。 ②地域コーディネーターが運営する地域学校協働活動本部(つながりの坂道の会)を中心に、地域企業との連携を進め、児童と教職員が積極的に参加できるようにする。 ③避難訓練や引き取り訓練を児童や保護者の実態を考慮して意図的・計画的に行い、児童・保護者の防災への意識を高める。		
ブロック内評価後の気づき			
学校関係者評価			
中期取組目標振り返り			

重点取組分野	令和 9 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく力	c1		
豊かな心	c2		
健やかな体	c3		
社会とつながる力	c4		
児童指導	c5		
特別支援教育	c6		
いじめへの対応	c7		
人材育成・組織運営(働き方)	c8		
地域学校協働活動	c9		
ブロック内評価後の 気づき	c10		
学校関係者 評価			
中期取組目標 振り返り			